

Book Review 13-8 戦争 #戦争の犬たち

『#戦争の犬たち（上）（下）』（フレディリック・フォーサイス著）を読んだ。著者は英国空軍勤務後、レポーターとしてジャーナリズムの世界に入り、通信社の特派員としてパリ、東ベルリン、プラハで勤務。その後、BBC放送に転職し、ビアフラ独立戦争取材の特派員として現地入りしたが、英国政府の方針に反する報道を行い左遷され、後に退職する。スパイ活動にも従事。『ジャッカルの日』、『オデッサ・ファイル』、本書は初期の名作。

『ジャッカルの日』の印税を用いて傭兵を雇い、赤道ギニア共和国に対しクーデターによる政権転覆を企てたが、未遂に終わったというフォーサイスに関する有名な逸話がる。これを基に本書を執筆したと言われている。本作は映画化されている（DVDを注文）。

アフリカの暴君が支配する小国にかなりのプラチナが埋蔵していることをある資産家が知り、傭兵を雇い、クーデターを仕掛けて、傀儡政権に挿げ替えて鉱山の利権を手に入れようとする話である。血なまぐさそうに思えるが、読後の感想は悪くない（清々しい）。富豪の意図したクーデターで終わらないからである。

タイトルの「戦争の犬たち」はシェクスピアの戯曲『ジュリアス・シーザー』の中の「戦争の犬を解き放せ (let slip the dog of war)」という台詞を引用したものだそうだ。

内容は三部に分かれるが、派手な戦争場面は第三章に少し出て来るが、『オデッサ・ファイル』と同様に、大部分は事前の綿密な情報収集、現地調査、武器弾薬や装備の入手、金儲けのための会社の設立や輸送船の買収などのクーデター準備に費やされている。この冗長とも思われる準備段階の記述が魅力と言えるかもしれない。ソ連の横やりや傭兵ライバルからの暗殺指令、富豪の娘との情事等も内容を盛り上げる。著者は未遂に終わった理想の国作りを、本書を執筆して成し遂げようとしたのかもしれない。

巨匠と言われる作家の作品は面白い。

プラチナは、化学的に安定しており、融点が高く、高い耐久性と希少性を持つ貴金属である。地球上の埋蔵量は金よりも少なく、産出される地域も限られているため、希少価値が高い。

用途は、ジュエリー（結婚指輪）や工業製品、医療器具など多岐にわたる。工業製品としては、自動車排気ガスの浄化触媒として使用され、燃料電池やハードディスク、耐摩耗性が必要な万年筆のペン先などに用いられる。医療器具の材料として使用され、白金地金や金貨などの投資用として注目を集めている。